

歴史に学んで「いま」に挑む

トルストイの「戦争糾弾論」

2022/04/15



悲劇でも喜劇でもなく「惨劇」です。

「歴史は繰り返す。一度目は悲劇として。二度目は喜劇として」とヘーゲルはいったとマルクスは言っています。いま、世界で起きている悲劇は、ヒトラーが起こした「悲劇」につづく二度目の悲劇であって、決して喜劇ではありません。また、悲劇の繰り返しでもありません。残酷な「惨劇」（ざんげき:こんな言葉ありません）です。

トルストイの『戦争と平和』の「エピローグ2」（終わりの言葉）は、小説の本体では解明できなかった「戦争」についての「謎」が詳しく述べられています。ここでは、「だれが、家を焼かせ、人々を殺させたのか？」を問うているのです。いま、私たちが、一番聞きたい問いであり答えです。（トルストイ『戦争と平和1・2』中村白葉訳・河出書房）

1789年、パリに騒動（フランス革命）がおこり、やがてそれは成長し、氾濫して、ついに西から東への民族移動として表現された。この運動は、いくたびも東を志向して、東から西への反対運動と衝突している。1812年に、この運動はその再極限 — モスクワに達し、その後はいちじるしいシムメトリーをなして、東から西への反運動となり、第一の運動とそっくりその

ま、中間の諸国民を自分の背後へまきこんで、進んでいる。この復帰運動は西における運動の出発点、パリに達して、沈静に帰した。(『戦争と平和』2: 491 頁)

この二十年の一期間、広大な田野はたがやされず、家々は焼かれ、商業は方向をへんじ、数百万の人々は、あるいは零落し、あるいは高み、あるいは移住し、そして、隣人に対する愛の掟を信奉する数百万のキリスト教徒が、たがいに殺しあったのである。

これらすべてのことは、はたして何を意味するのだろうか？ 何からおこったのであろう？ いったい何が、これらの人々に家を焼かせ、自分と同じ人間を殺させたのだろうか？ これらの事件の帰因はなんだろうか？ どんな力がこれらの人々に、このような行動をとらせたのだろうか？ これこそ全人類が、過ぎ去った運動のこの期間の記念物や伝説に突きあたって、思わず自分に提起する、純真な、また極めて当然な問題である。

これらの問題解決のために、人類の常識は、諸国民および人類の自己認識を目的とする歴史科学に向かうのである。

戦争を起こすのは権力

なんと、大上段に構えた、力強い宣言でしょうか。ここから、戦争を糾弾(きゅうだん)するトルストイの「歴史科学論」が、容赦なく展開されていきます。現在、同じような疑問を抱いている私たちは、トルストイの古典『戦争と平和』に大いに期待します。

歴史上の事件の原因とはなにか？ — 権力である。 権力とはなにか？ 権力とは一人の人間に移された多数の意志の総和である。いかなる条件のもとに、大衆の意志は一人の人間の上に移されるか？ その一人物によって全員の意志が表現されるという条件のもとに、である。すなわち、権力は権力である。つまり、権力は、われわれにとってその意味の不可解な言葉である。

「数百万の人を殺させたり、家を焼かせたりしたのは一人の男の権力がさせるのだ」とトルストイはいいます。でも、本当に一人の人間の権力で、数百万もの人を殺せるものでしょうか？ 実際に手を下す人たちは、なぜ、その一人の指導者の命令に従うのでしょうか？ また、疑問が生じます。トルストイも、考え直します。

事件の行なわれるときにはつねに、一人ないし数人の人物が現われ、その意志によって事件が行なわれたもののように思われる。ナポレオン三世が命令すると、フランス軍がメキシコへ行く。プロシヤ王とビスマルクが命令すると、軍隊がボヘミヤへ行く。ナポレオン一世が命令すると、軍隊がロシヤへ行く。アレクサンドル一世が命令すると、フランス人がブルボン王家に服従する。こうして経験はわれわれに、どんなものにしる、事件がおこる場合には、事件はかならず一人ないし数人のそれを指令した人間の意志と結びついていることを教えるのである。

数百万の人間が互いに殺しあったり、五十万の人間を殺したりするよう
できごとは、一個の人間の意志を原因として持つというわけにはゆかない。
一個の人間が一人で山を掘りくずすことができないように、一人の人間が
五十万の人間を死なせるわけにはゆかない。しかし、ではなにが原因か？

ある歴史家たちはフランス人の征服欲とロシア人の愛国心が原因であつた
といっている。またある歴史家たちは、ナポレオンの大軍がまきちらした
民主的要素だとか、ロシアがヨーロッパ同盟に加入せざるをえなかった必
然とか、それに類したことを言っている。しかし、いったいどうして数百
万もの人間が互いに殺しあいをはじめたのか、だれがそれを命令したのか？

おそらくそんなことをしたところでだれもよくなる者はないばかりか、み
んなわるくなるばかりであることはだれの目にも明らかなはずである。そ
れなのに、彼らはなぜそんなことをしたのか？ この無意味な事件の原因
については、無数の回顧的推論をくたすことができるし、また現在それ
をしてもいる。しかし、こうした説明のおびただしさと、そのすべてがひと
つの目的に合致するという事実も、それは単に、こうした原因の無限に多
いことと、そのうちのひとつをも原因とは呼べないことを、立証するにす
ぎない。

動物学的法則

何がゆえに、数百万もの人間が、互いに殺しあったりしたのか、こうい
うことが、肉体的にも精神的にもよからぬことであるのは、開闢(かいびゃく)
いらいだれ知らぬものもないことだというのに？ ほかでもない、それは
不可避免的に必要だったからである。これを実行しながら人々は、秋になる
と、蜜蜂が互いに殺しあったり、動物の雄が互いに滅ぼしあったりして実
行するあの盲目的、動物学的法則を実行したからである。この恐ろしい問
題に対しては、これ以外の答えは考えられない。

おやおや、人を殺すのは動物学的法則のせいなのだそうです。そういえば、
この『戦争と平和』の「エピローグ2」のトルストイの考察について詳しく
論じている政治学者アイサー・バーリンもその著『ハリネズミと狐』で次の
ように言っています。

カール・マルクスは歴史の進化を支配する一法則 — それはダーウインの
新しい進化論によって意気高らかに転換させられた生物学・解剖学からの
類推という、その当時の魅力的な方法によって把握される — 発見しよう
として、まったく不成功であったとはいえ、もっとも大胆な試みを敢行し
た。トルストイは、マルクス同様(『戦争と平和』を書いていたとき、彼は
マルクスについては全く知らなかったようである)、もし歴史が科学ならば、
真の歴史法則を発見し定式化することが可能でなければならないというこ
とははっきり理解していた。(岩波文庫:30頁)

動物学的法則と人間の自由意志

『戦争と平和』は、トルストイ(1828-1910)が36歳のときに執筆を始め、1865
年から1869年にかけて雑誌『ロシア報知』で発表したもので、1859

年に刊行されたダーウイン(1809-1882)の『種の起源』や、バーリンは懐疑的ですが、マルクス(1818-1883)の『経済学批判』をすでに読んでいた可能性はあります。とはいえ、「人間が数百万の人間を殺したのは動物学的法則のせいだ」とするのは、あまりにも、無責任な論旨ではありませんか。

トルストイもそのことを次のように弁明して、「そこには人間の自由があるのだ」としています。でも、これはあまりにも苦しい弁明です。

この真理は、明瞭なばかりか、各人にふかく生得のものであるから、もし人間にべつの感情や意識がなかったら、あらためて証明するにも価せぬくらいのものである。ところが、その感情と意識によって、人はなにかの行動を行なう場合には、そのあらゆる瞬間に自分は自由だという確信を持つのである。

トルストイ批判と批難

このトルストイの「歴史」と「歴史科学」に対する投げやりの姿勢を批判し批難する人は多いのです。

そのことを、アービンが次のように指摘しています。

トルストイをまず小説家として扱う人々は、ときとして『戦争と平和』のここかしこに散在している歴史的、哲学的な文章を、ひどく乱暴に物語の流れを中断するばかりか、この偉大ではあろうが自惚れの強すぎる作家独特の、なんでもないとこで脱線するという嘆かわしい癖の現われとして、それ自体としてはまるで面白くない不釣合いな自家製の形而上学、はなはだ非芸術的で、芸術作品全体としての目的と構造にとってはまるきり無縁のものに見なしてきた。(同14頁)

そして、作家や批評家たちの言い分を次のように紹介しています。大文学者も散々です。

「著者が思想家としてよりも作家として優れていることはわれにとって幸せなことである」

「この小説の知的要素は非常に弱く、歴史哲学は平凡で浅薄、事件に対する個人の人格の決定的な影響力を否定したことは不可解な謎にほかならない」
「沼地の哲学」「歴史的宿命論を発明」「説教癖」「おおぼら吹き」「茶番劇」などなど。

今回の「一読百解」の「歴史的な大量虐殺」に対する結論は、「結局、古典でも、わからない」でした。

悲劇の次は惨劇でその次は慙劇……

「だれにも分からない」ではすまされないのが、今回の惨劇です。どこかに、答を見いださなければ、また、同じようなことが起きます。悲劇の次の「惨劇」につづくものは、なんでしょう？ それで、私は新たに「慙劇」(ざんげき)という言葉を用意しました。先に述べた「惨劇」の「惨」は「とてもま

ともに見られないほどひどいさま」をあらわしていますが、今度の「慙」は「恥しく思う」ことです。「無慙」(むざん)は、「むごたらしく、残酷なこと」ですが、仏典によれば、「恥しく思わない」ことだそうです。わたしたちは、同じ人類として、大いに恥じています。

都築正道